



理事長挨拶

佐藤 正美

本学会は、1991年に前身である「看護診断研究会」の発足を経て4年後に、適切な看護を行うために看護診断ならびに介入・成果に関する研究・開発・検証・普及を行うこと、ならびに看護診断に関する国際的な情報交換や交流を行うことによって、看護の進歩向上に貢献することを目的として設立されました。1995年に第1回学術大会が開催され、2022年には第28回学術大会が開催されました。日本看護診断学会は、「看護診断」という概念を社会に浸透させ、共通用語として「NANDA-I看護診断」の普及に大きな役割を担ってきました。

さて、2019年に発生したCOVID-19は、2020年に入ってから世界中で感染が拡大し、世界的流行（パンデミック）をもたらしました。多くの命を奪い猛威を振るう感染症に対して、無力である人間の存在を実感するとともに、その中で生き抜く強靭さとしなやかさが必要であることも実感しました。このような困難な時期だからこそ、看護として何のために何を大事にとらえ行動するのか、それを示す必要があるのではないのでしょうか。

今日の日本における医療提供体制は、超高齢化で少子化が進む中、「病院完結型」ではなく地域全体で支える「地域完結型」へ向かい、2025年の地域包括支援ケアシステムの構築へ向けて大きく変化しています。その中で、

看護診断の果たす役割は何でしょうか。病棟・外来・地域・職場・学校・在宅など対象者の生活の場で、医療職や介護福祉職とともに、看護職は生活を支える医療専門職として力を発揮することが求められています。多職種と連携して対象者へケアを提供する場合、看護上の問題に焦点をあてて展開する、というよりは、対象者のニーズに沿ったゴールを設定してケアを提供することだと考えます。もちろんこれを実行するためには、対象者の望むより健康な姿（ゴール）を描き、現状とのギャップを看護問題としてとらえ、アセスメントしケアを計画することになります。すなわち、多職種と連携しケアを提供するには、いずれも看護診断を必要としています。

病院では入院期間がますます短縮化し、アウトカム思考で医療が展開しています。ケアを受ける人が気がかりなことや望むことに焦点をあて、その人の持つ力が高まるように看護を提供するには、医学モデルではなく看護モデルの思考が必要です。そのためには、“看護あたま”で対象をみる思考を持つことが必要であり、それを支えるのが看護診断だと考えます。看護診断とは、個人や集団の健康状態/生命過程に対する人間の反応、およびそのような反応への脆弱性についての臨床判断であり、看護診断は、看護師に説明責任のあるアウトカム達成に向けた看護介入の選択根拠になるからです。

このように医療・福祉の体制が大きく変化している中、会員の皆様のニーズはどのようなもののでしょうか。今後、皆様へ様々な発信をしてまいります。そのために、理事会では会員を対象とした調査を行う準備をしております。ぜひ、率直なご意見をお寄せください。

今後とも本学会へのご支援、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



第29回 日本看護診断学会学術大会のご案内

【大会テーマ】

いま改めて看護師の仕事を発信しよう

～看護師の臨床判断を伝える 生活者に、他(多)職者に、地域に～

大会長 村田 節子 (第一薬科大学看護学部)

来る2023年7月1日(土)・2日(日)に、アクロス福岡(福岡市中央区天神)で第29回日本看護診断学会学術大会を開催いたします。コロナ禍で新しい生活スタイルを余儀なくされましたが、今回は是非対面で皆様とディスカッションしたいと願っております。

大会テーマは「いま改めて看護師の仕事を発信しよう～看護師の臨床判断を伝える 生活者に、他(多)職者に、地域に～」といたしました。

諸外国では医療の6割以上が地域・在宅で行われ看護

診断もその領域の診断名が多く開発されています。我国ではまだ病院等の医療施設主体ですが、確実に「病気になっても自分らしい生活、住み慣れた地域での療養」のニーズが高まり、在宅・地域医療の重要性が増しています。医療は人々の幸福の為に健康という資源を活かす支援システムです。患者という立場になった人々が自分の生活に「生活者」として帰ることができる医療が求められます。看護師はそういう人々の「健康プランナー」として支援を行う使命があると考えます。

本大会では看護師の思考や臨床判断について広く討議を行い、「健康プランナー」である看護師の仕事を発信していきたいと考えます。

大会のテーマである～看護師の臨床判断を伝える 生活者に、他（多）職者に、地域に～のために、シンポジウムⅠとして【臨床から在宅へ「看護の臨床判断」をつなぐ】を企画しました。ここでは総合病院の看護部長、専門看護師、訪問看護師、大学教員を交え治療の場から在宅への「途切れないケア」の為に看護の臨床判断をどのように伝え患者・生活者を支えていくのかを検討したいと思えます。

シンポジウムⅡでは【診断しにくい領域・他職種との協働が必要な看護問題に取り組む「看護の臨床判断」】を企画しました。「看護診断」ばかりが看護の臨床判断ではありません。「診断でない看護問題」をきちんと判断しそのケアを立案・実施する事が求められます。そこでは患者本人が意思決定しにくい「精神看護」や治療主体の「手術看護」の場のエキスパート、更に「リハビリテーション」領域の作業療法士を交え、患者から生活者へをアシストする看護の役割を検討したいと思えます。

教育講演では、卓越した臨床判断が求められる専門看

護師養成の立場から京都府立医科大学の吉岡さおり先生に、更に今後ますます求められる慢性疾患との付き合い方を考える為に、本邦の「病みの軌跡」研究の第一人者である甲南女子大学の黒江ゆり子先生にご講演頂きます。

そして大会の重要なテーマである「他（多）職者」への発信として特別講演に「看護師は何者なのか、何をやる人なのか」という私の長年の間に示唆を与えて下さった、NPO法人 対人援助・スピリチュアルケア研究会理事長の村田久行先生をお招きしてご講演いただきます。また、一方のテーマの「生活者」「地域」を意識して福岡博多の産んだ漫画家、博多町屋ふるさと館館長の長谷川法世氏に博多の街や人々の暮らしについてお話いただき「生活者」を意識したケアについて考えたいと思えます。

医療は我々医療者だけで成り立っているわけではありません。今回は企業や業者の方々にも「患者を直接支える企業」「医療者を支える企業」「多くの仕事をつなぐ企業」等を意識してこのコロナ禍で共に戦う同志としてご参加頂けることを願っています。

7月1日はその昔、疫病退散を願って始まったとされる博多祇園山笠の初日でもあります。皆様のご発表・ご参加を心よりお待ち申し上げます。

第29回日本看護診断学会学術大会の概要

会期：2023年7月1日(土)、2日(日)

会場：アクロス福岡 (<https://www.acros.or.jp/>)

演題登録期間：2022年12月1日(木)～2023年1月31日(水)

参加登録期間：事前登録：2022年12月1日～2023年5月31日

一般登録：2023年5月31日～2023年6月30日

第28回 日本看護診断学会学術大会を終えて



第28回日本看護診断学会学術大会 大会長 伊東 美佐江 (山口大学)

3年目となるCOVID-19禍の中、国民の健康を守るために奮闘されておられる看護職をはじめ関係各位に心から敬意を表します。このたび、第28回日本看護診断学会学術大会を2022年7月16日にライブ配信し、7月16日～8月23日の期間でオンデマンド配信にて、山口県より配信し開催いたしました。本学術大会は、Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursingにおける5th Sigma Asia Region Conferenceとの共同開催にて、多数の方にご参加・ご視聴いただき無事に終了する事ができました。

少子超高齢化や医療の高度細分化もあり、社会情勢は変化してきました。多様な健康課題に対するケアシステムに不可欠な多職種連携の中心は、いつも患者／クライアント／利用者／住民とそこご家族であり、「パーソンセンタードケアに活かす看護実践と用語」をメインテーマと掲げ、日本の視点はもちろん、国際的な視点も含め

て企画いたしました。

“パーソンセンタードケアに活かす看護実践”につなぐプログラムとして、特別講演では宇都由美子先生（鹿児島大学病院）に「専門家間の共有意思決定過程（IP-SDM）における医療情報の活用と看護職の役割」をご講演いただきました。理事長特別企画シンポジウムでは「電子カルテの看護記録を再考する」をテーマに、長谷川智子先生（福井大学）、岡田みずほ先生（岩手県立大学）、村岡修子先生（NTT東日本関東病院）より、看護基礎教育課程での看護記録教育と思考過程の可視化、地域で共有し協働するための看護情報、電子カルテ時代の看護記録のあるべき姿への示唆をいただきました。特別企画シンポジウム「看護実践における臨床推論」では、山勢博彰先生（山口大学）、中嶋智子先生（佐久大学）、吉田和美先生（県立広島大学）、鈴木康江先生（鳥取大学）、山田裕紀先生（広島都市学園大学）それぞれの立場から、思考プロセスと臨床推論、看護情報の価値、チームにおける看護実践、助産活動での臨床推論、急性期看護での臨床推論をお話いただきました。また、教育講演では、上鶴重美先生（NANDA-International前理

事長、看護ラボラトリー代表)による「NANDA International看護診断：開発の現状と今後の展望」、Maria Müller Staub 先生による(ACENDIO President)「Making nursing visible in Electronic Health Records - Contributions of ACENDIO (the Association for Common European Nursing Diagnoses, Interventions and Outcomes)」,小川仁志先生(山口大学)による「看護のための哲学思考」で熱く語っていただきました。交流集会もライブ配信で行われ、ライブで交流できた醍醐味もありました。さらに、理事や会員の先生方のご協力で、教育実践セミナーは10題、交流集会や多くの一般演題、共催セミナーもあり、オンデマンド配信にて繰り返し学ばせていただいたとの多くのお声をいただきました。

あらゆる場での看護職への期待は増すばかりで、さらなる看護の専門性を追求し、コアの概念を大切に、効率化を図りながらさらなる看護実践、そして、根底にあるアセスメントと臨床判断、それを表わす用語と看護記録について、これからも考えながら教育・研究・実践に携わっていきたいと思います。このたび、ホームページ作成に始まり、諸連絡や演題登録システム、翻訳などなど、費用を抑えるために知恵と時間と誠意をもって尽力していただいた山勢博彰実行委員長をはじめ、企画委員や事務局メンバーには、心から感謝しています。また、このような機会を与えてくださいました、日本看護診断学会理事長ならびに理事、会員の皆様に深謝申し上げます。皆様のご健勝と一日も早いCOVID-19感染症の終息を祈念申し上げます。

第28回 日本看護診断学会学術大会奨励賞

本学術大会では、優秀な研究成果の演題を発表した会員に、その成果を称えるために一般演題に学術大会奨励賞を設けました。学術大会奨励賞委員会による厳正な審査の結果、以下の2題が選出され、賞状と記念品を贈呈いたしました。(大会長 伊東美佐江)

- ◆ 田中里美氏(岐阜医療科学大学)ほか2名
「先行オーガナイザーによる有意味受容学習に基づく看護学生の看護診断能力育成教育プログラムの有用性の検討」
- ◆ 那須明美氏(山陽学園大学)ほか5名
「がんと診断された女性の妊孕性温存に関する意思決定の英語文献の検討—「意思決定葛藤」の関連因子に着目して—」

第28回 日本看護診断学会学術大会に参加して

淀川キリスト教病院 坂井 真愛

看護実践現場では、患者さんが入院すると看護診断を立案し、それに基づいて看護実践を行なっていきますが、看護の道を志した時から看護診断を学び、それはどんな現場においても臨床判断の結果として表すものです。

本大会のメインテーマは「パーソンセンタードケアに活かす看護実践と用語」であり、今回の参加から、改めて患者さんや家族を中心とした看護実践とは何か、きちんと自分がアセスメント・判断ができていのかを考える機会となりました。私が勤務する病棟では、終末期の患者さんが多く入院されます。症状コントロールだけではなく、その人の大切にしている価値観や生き方に焦点を当て、スタッフみんなでそこを大切に働いています。疼痛がある患者さんに急性疼痛という看護診断を同じよ

うに立案しても、どのように鎮痛薬を使用し、その人のQOLを上げるかは同じではありません。大事なことは、患者さんや家族に必要なケアを途切れることなく、遂行されることですが、そこには適切な判断と共通理解がある用語で患者さんの状態を共通理解することが必要です。看護診断を立案し、評価するだけではなく、用語を正しく理解し使用する大事な要素も含まれているのだと改めて学びました。

新型コロナウイルス感染症拡大により世の中の生活様式は変化し、医療現場への影響は計り知れません。けれども、現場で働く看護師が行う看護実践はこれからも変わることはありません。「用語」に対して常に敏感である姿勢で、パーソンセンタードケアを軸にした介入をしていきたいと思っています。

第28回 日本看護診断学会学術大会に参加して

山口大学大学院医学系研究科 小野 聡子

基礎看護教員として初めて学ぶ看護過程の教育に携わり、情報の取舍選択、アセスメント、そこから導き出した看護上の問題に対する成果の設定、介入、評価と指導するうえで、時に学生の頭の中を覗いてみたいと思ったことは一度や二度ではありません。混乱している学生の

思考を紐解くことの難しさをいつも感じます。そんな私にとって看護診断学会は、そのためのヒントをいただける場でもあります。今大会も例外ではなく、改めて看護記録の重要性、基礎看護教育から学生の思考を整理し、可視化していくことの重要性を感じました。また、実習

でのタイムリーな記録指導などできていない点を反省させられる機会でもありました。

臨床につながる思考やその記録についてどのように教育すればよいか、そのことを考えた時、改めて「パーソンセンタードケア」についても考えさせられました。「パーソンセンタードケア」と一言と言っても、アセスメントによって導き出した患者ニーズに対応したケアの実践、患者の価値観に基づいた意思決定支援、それらを実現するために必要な臨床推論、思考の言語化、情報の共

有と、様々なスキルが求められます。それら一つひとつに患者の状態をどのように表すのか用語も必要です。学生への教育の前に、自分自身がもう一度よく考えなくては…と感じたところで、先生方のご講演が、一つ一つを紐解いてくださいました。

また今回は、NANDA-IだけでなくACENDIOの取組みについて知ることができたうえ、Sigma Asia Region Conferenceとの合同開催で、国際的な視野を広げる貴重な体験ができました。

国際交流委員会からのお知らせ

国際交流委員会 委員長 曾田 陽子 (愛知県立大学)

1973年に全米看護診断分類会議が開催されてから50年を迎える2023年に、NANDA International 50th Conference: Shaping, Informing, and Communicating Nursing and the Human Experienceが、アメリカ合衆国マサチューセッツ州のポストンカレッジで開催されます(2023年6月14-16日)。また、ACENDIO conference Rome 2023: Nursing-generated data: predictive analytics and eHealth Strategiesが、イタリア国ローマのユニカミルス大学で開催されます(2023年3月16-18日)。

日本看護診断学会研究助成のお知らせ

研究助成選考委員会 委員長 長家 智子 (第一薬科大学)

日本看護診断学会には、日本における看護診断を発展させ、看護の質の向上を図ることを目的とした「研究助成制度」があり、50万円を上限として研究費を助成しています。申請手続きは、日本看護診断学会ホームページの(<http://jsnd.umin.jp/>)、委員会のサイドバーから「研究助成選考委員会」のページをご確認の上、掲載している「研究助成申請書」「研究経費支出計画書」を作成し、日本看護診断学会事務局に送ってください。申請する研究は、看護実践において普段取り組んでいる看護診断に関するものであれば、どんな内容でも結構です。

助成を受けた場合、研究成果を日本看護診断学会学術集大会で発表して頂くとともに、学術誌へ投稿して頂くことになります。これは、他施設の看護の質の向上も図っていくという研究成果による社会貢献を目的としています。2023年度の申請締め切りは、2023年8月末です。皆様からの応募をお待ちしています。

論文を募集しています！

編集委員会 委員長 黒田 裕子 (湘南鎌倉医療大学大学院)

編集委員会では、看護診断に関連する未発表の原著、総説、研究報告、実践報告、事例報告、資料の論文を随時、募集しています。特に、提出期限はありません。投稿していただいた後は、速やかに2名の査読者に査読をお願いし、早期掲載をめざしております。2022年3月より電子投稿となっております。詳しくは学会ホームページをご覧ください。

看護実践の貴重な資源となりうる論文の投稿を心よりお待ちしております。

入会のご案内

本学会は適切な看護を行うために看護診断に関する研究・開発・検証・普及並びに会員相互の交流を推進し、同時に看護診断に関する国際的な情報交換や交流を行うことによって看護の進歩向上に貢献することを目的としています。是非、多くの方々のご入会をお待ちいたしております。ご入会に関しましては私共のホームページ(<http://jsnd.umin.jp/>)入会申し込みよりオンラインにてお申込みくださいますようお願い申し上げます。

入会手続きに関するご不明点は 日本看護診断学会事務局

TEL:03-3352-6223 E-mail:jsnd@convention-access.comまでご連絡をお願いいたします。

日本看護診断学会ニュースレター 第25号

発行日 2022年11月1日

編集委員/黒田裕子、明石恵子、福田和明、古川秀敏、和田美也子、山田紋子

